

読書生活と読みの授業

上越教育大学 松本 修

はじめに

学校教育における教科教育のあり方に対する要望は、たとえば児童・生徒の保護者から学校へ寄せられる希望のような形で現れると一般には思われているふしがあるが、本当にそうだろうか。たとえば、「受験に失敗しないように、しっかりした漢字の読み書き能力や確実な文法的知識を身につさせてほしい」という要望を、多くの保護者が学校に対して寄せている。」というような言い回しは一見信憑性があるように思われているが、当の保護者自身が、本当に必要な国語学力というものをどのように考えているかはわからない。また、たとえ保護者がそのような要望を持っているとしても、社会生活の中で生涯にわたって「役に立つ」国語学力としてどのようなものを考えているのかということは別だということも言えるかもしれない。自身の生涯にわたる学習活動において、どのようなものを優先させようとするのかというようなことと、先の受験学力に対する要望とは乖離しているということも考えられる。

「生涯教育から見た各科教育」に関する調査研究”においても、保護者が、小学校から高等学校までの学習経験をもとに「学んで良かったこと」「出来ればこうであれば良かったこと」としてあげたのものの中では、確かに漢字力を含めた基礎的な読み書き能力が多いが、一方で、文学作品・古典文学作品の読みの楽しさや、論理的思考力・表現力などをあげる回答も目立っていた。このことは、いわゆるカルチャースクールや社会教育事業として行われている様々な公開講座などにおいて、しばしば「源氏物語を読む」「郷土の文学」「上手な聞き方・話し方」といった名称を冠した講座が開かれていることと呼応する。基礎的な読み書き能力は社会生活に必要な知識・技能であるから不可欠であるが、生涯にわたって自ら学ぼうとするとき、国語科に関わっては、読書生活やコミュニケーションに関わる教養の基礎を培う内容が、学校における教科教育にもまた求められているのである。

たとえば「源氏物語」を読もうとある大人が考えるとき、「国語科の授業で読んで楽しかったからもう一度読もう」という考え方と、「国語科の授業ではよくわからなかったからもう一度読もう」という考え方、あるいは「国語科の授業では楽しく読めなかったからもう一度読み直そう」「国語科の授業ではほんの少ししか読めなかったからじっくり読み直そう」というような様々な動機があるであろう。しかし、少なくとも国語科の授業で古典作品の読み方をきちんと学んでいれば、いつでも読むことはできるはずである。大人たちが様々な講座に参加するのは、共に活動する仲間を求めてということも大きな理由であろうが、本を手にとっても読み方がよくわからないということにも原因があると見るができる。国語科教育は、生涯学習社会において将来必要となる「読み方」に関する知識・技能を身につさせることを目標の一つに据えるという視座に立つことを求められているのである。ここでは、読書生活における読みの実相と教室における授業での読みの実相との違いを素描しながら、読みの授業における読み

方の知識・技能の指導が、日常の読書生活における読みにどのような形で結び付いていくべきかについて、具体的な作品に依りつつ述べることにしたい。

「再読」の授業に見る「読み方」

藤森裕治は、高校生に、4年以上前に読んだ経験のある児童文学作品を再読させ、その感想をもとに読者としての自己を見つめ直すという学習活動を單元化し、その結果を報告している。² その中に報告されている高校生のエッセイに次のような部分が見られる。

私がかつて読んだ本の中に『やまなし』がある。これを読んだのは、私が小学校六年の国語の授業のなかでだ。その当時の感想は、情景がきれいだとか不思議だとか、感覚的に読んでいたと思う。かにの兄弟がかわいいとか、クラムボンとは何だろうとか、あまり深く考えずに、感じたままの素直な思いを抱いていた。それと同時にもう一つ、「あまりよく分からない話だ」という感想を持っていたのを覚えている。

このような感想を持った理由は、この作品が当時の私にとって初めて出会うタイプのものだったからだと思う。それまで私が読んでいた本は、ちゃんと起承転結があるような、物語性の強いものばかりだった。それがこの作品ではそんなものがなく、そのためどう読んだらいいのか分からなかったのかもしれない。意味のない言葉なども受け取りきれなかった。

今、この作品を読むと、言葉がすごく新鮮に自分の中に入ってくる。そして、漠然ときれいだと思っていた情景も、水の「底」と「天井」という空間に限定して想像するようになった。谷川の底から見た情景を自分もその場で見ているような気持ちになり、「純粹」という言葉が、久しぶりに浮かんだ。

藤森はこのエッセイを「現在支持型」として分類しているが、ここでの関心から見ると、小学生当時と高校生としての現在とにおける読みのあり方の変化に言及しているものと見える。小学六年生当時の読みを「感覚的」「感じたままの素直な思い」「あまりよく分からない話」というような言葉で表現しており、一方再読時の読みを「言葉がすごく新鮮に自分の中に入ってくる」「水の「底」と「天井」という空間に限定して想像する」というような言葉で表現している。このような読みのあり方、読みの方略（以下この呼称で統一する）の相違について、自ら言及し、小学生当時も持っていた読みの方略としての「起承転結」のような物語の枠組みが、「やまなし」（宮沢賢治）になく、それまでの読みの方略が通用しなかったため、感覚的に読むしかなかったということを分析している。言及はないが、現在ではこのようなタイプの作品に対応する読みの方略を持っており、そのため「言葉がすごく新鮮に」感じられ、情景の空間の想像もはるかに臨場感のあるものになったものと判断できよう。

また、同じ藤森の「ごんぎつね」（新美南吉）を扱って感想の交流を行った授業記録には、次のような発言が見られる。³

前に読んだときは悲しい物語で泣いてしまったことを覚えています。ただ、あの頃は物語

をあらすじでとらえていたんですが、今回読み直してみて、擬声語が効果的に使われていることに気がつきました。

小学校の頃は、この作品に出てくる「ごん」は狐というより、物語の主人公なんだと、自然に受け止めていました。それは、一つには二本足で立っている「ごん」の挿し絵の影響もあったと思いますが、人間の子どものような存在として「ごん」が描かれていることをそのまま受け止めていました。でも、今読んでみると、それは虚構の設定だっていう前提というか、そういうさめた目でこの物語を見つめているんですね。それで、あらためてこの物語を読んでみると、狐はあくまでも狐なんだということが感じられて。そこにさっき言ったような「人間の残酷さ」という感想が浮かんできました。

前者は「擬声語」というようなカテゴリーで捉えられる、かつては所持していなかった表現分析による読みの方略を、現在では所持していることに言及している。また後者は、小学校の頃も「主人公」というような用語ないし概念に対応する理解はしていたが、現在は「虚構」「設定」というようなカテゴリーで捉えられるような物語の読みの方略を持っていることに言及している。藤森の研究は、学習者の物語理解の総体としての変容を追うものとなっており、主として学習者の読書人としての成長に光が当てられたものであるが、読みの方略の相違、読みの方略の獲得過程の回想が行われているという側面もあろう。もちろん、こうした相違の幾分かは、読みというような行為に直接的には関わらない総合的な意味での発達段階の相違に起因することも確かであろうが、一方で、そうした発達段階に応じて、国語科の学習において読みの方略を身につけてきたことも確かである。このような側面から生涯学習社会における学校の外での読書に、学校における国語科教育における読みの指導がどのように関わっているかという実相をさらに詳しく捉え、生涯教育に対する国語科教育の関わり方を考えていくという方向が考えられる。

成人の場合の再読調査

藤森の研究は高校生を対象としたものであり、「授業」という枠組みの中での再読であるが、生涯学習における〈読み〉のあり方の実相をさぐるために、成人を対象として、以下のような再読調査を行った。

- | | |
|------|---|
| 1 時 | 1998 年 12 月 |
| 2 対象 | 成人男性 4 名 女性 2 名 うち 20 代大学院生男性 3 名、30 代大学院生（現職教員）1 名、20 代大学生女性 2 名 |
| 3 方法 | 1 教示文に基づき、感想文を書いてもらう。（教示文を示し、2 週間以内に提出。）
2 一部の対象者（20 代大学院生男性 3 名）に感想をもとにインタビューを行い、テープレコーダーで記録する。 |

4 教示文 「高校生以前に読んだことのある文学作品を読み返し、かつての感想と比較しながら感想を書いてください。」

得られた感想文は以下の通りである。

A：20代大学院生男性 作品「走れメロス」（太宰治）

中学2年生の時に読んだ際は、友情の大切さを訴えている物語だと思った。メロスを正義とし、国王ディオニスを悪として読んだ。「市を暴君から救うのだ。」とメロスが単身ディオニスに立ち向かう姿は、勇敢な者に見えた。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」とメロスが言ったことは、自分の思いを代弁してくれたと感じた。一方「人間は、もともと私欲の塊さ。信じては、ならぬ」と言って人間を殺しているディオニスは、憎むべき人間であった。そして、メロスの約束に対して、「命が大事だったら、遅れてこい。おまえの心は分かって居るぞ。」と言ったことには、極めて不快であり、嫌悪感がひどかった。そのため、メロスが約束を守り、ディオニスにうち勝ってほしいと思った。

最後まであきらめずに走ったメロスの根性に私は感動した。そして、メロスとセリヌンティウスが自分の弱い心を戒めて欲しいとして殴り合ったことに、自分もこうあるべきだと思った。その上で感謝し合った二人に、強い友情を感じた。その強い友情がディオニスを改心させたのは嬉しかった。

現在ではこの物語が、人間は信じられる存在であると訴えているように感じている。

私はディオニスが「疑うのが、正当の心構えなのだ、わたしに教えてくれたのは、お前たちだ。」と言ったのがよくわかる。「口では、どんな清らかなことでも言える」という言葉は私自身の経験から理解できる。

もちろんメロスの心情には好意的である。しかし、メロスは自分と距離があると初めは感じていた。なぜなら、メロスのように私は完全なる正義を振りかざすことができないからである。私がメロスに同調したのは物語途中からだった。メロスは王城に向かう途中、「君を欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！」と疲労による精神の弱さが露呈する。そのために、ディオニス同様に人間らしさが出ていと感じ、メロスに寄り添うことができた。だからこそ、その弱さを越えて立ち上がったメロスには、「走れ！ メロス」と応援したくなった。

メロスが約束を守り人間が信じられるべき存在だと感じ取ったディオニスが他人を信じるのはこれからである。彼は自分が人間を信じることができる期待感、喜びに溢れている。それには人間らしさが強く感じられ、私は快く感じられた。

B：20代大学院生男性 作品「砂場の少年」（灰谷健次郎）

私がこの本を読んだのは中学生から高校生になる春休みに、入学する高校から感想文の宿題として出された時である。

私は中学校時代、授業もおとなしく受け、生徒会の役員もこなし、校則などでたとえ理不尽と思うことがあっても、我慢するような生徒だった。教師の側からみれば扱いやすく、いわゆるいい子に映っていたことだろう。そんな自分と比較して、作中に登場する中学生は、生き生きと自分の意見を言い、曲がったことには手厳しい。その姿に痛快さを感じたとともに、自分

にはない発言力や行動力を持つ彼らにまぶしさを感じていた。

中でも、中学生の中で、中心に描かれていると思われる西文平は、教師の発言や自分の立場などを考えて、冷静で、時には冷たいとも受け止められる毅然とした態度をとる。当時の自分が持ち得なかった大人びたその態度に憧れていた面もあった。

その一方で、自分と、通っていた中学校の同級生のことを考えると、果たして、そんなにしっかりとした考えを持つ中学生がいるのだろうか。それは単なる作者の理想像であって、現実離れしているのではないかと感じたのも事実である。

今作品を読み返してみると、当時と大きく異なる点が2つある。まず、当時同年代ということもあり、中学生の立場に自分を重ねて読んでいたのが、臨探で西文平達の3年C組を担当するようになった葛原順に自分を重ねた点である。その組の生徒を問題児扱いし、自分の考えを押しつけようとする先生達とは異なり、彼は生徒に先入観を持たず、まずは生徒の意見を聞く。その上で、自分の考えを提示する。なかなか心を開こうとしない生徒や不登校の生徒がいても、まずはその子の言い分を聞いて、寄り添っていく。そこから、互いに少しずつつうち解け、信頼関係が築かれていくのである。学校という組織の中で考えると、教員としては責任を果たしていない点も多いとは思いますが、今の時代に合わせても理想の教師像と言えるだろう。

次に、以前は大人に感じていた西文平を、とても幼くもろい存在であると捉え直したことである。小さい頃、周りの期待からいい子を演じていた彼は、プレッシャーを軽減したくて母親にウソをつく。幼い頃にはいい子を装うことで守ってきた、弱い、醜い自分自身を、中学生である今は冷静さによって、守っているのではないか。自分の周りにある壁を崩して他人と接することが苦手の彼の幼さ、繊細さが印象に残った。

C：20代大学院生男性 作品『『平家物語』巻九「敦盛の最期」』

私にとって最も印象の強かった古典作品は、中学二年時に学校の授業で学んだ「敦盛の最期」である。教材の掲載されていた教科書は、教育出版のものであった。

カラーページにある「鎌倉時代の武者姿」という絵に興味を覚え、美術の課題として取り上げたこともある。

当時持った感想として今でも覚えているのが、「熊谷はどうして敦盛を殺したのか。殺せと言われたからといって、人殺しは絶対によくない。」ということである。その原因は、戦争の映画や劇団の公演を用いた教育を受けていたことであると思う。それにより、戦争という異常な状況においても人が殺されるという事実があることを強く印象付けられ、殺人への嫌悪感が身についていたようである。殺人は悪であり、人助けが善であるというきわめて単純な認識を持っていたに違いない。

したがって、物語の読みというところから離れて、作品と現実の自分の経験とを関連付けて考えていたのではないだろうかと思う。

一方、現在の私がこの作品を改めて読むにあたって考えたのは、時代背景と前後関係である。物語の中で人間がどう考え行動するかという点が当然基本になると思ったからである。

こうして読んでみて、熊谷次郎の武者に似合わぬ憐憫の情という事に強い印象を持った。当時の常識では、相手方の大将を討つ事ができるのなら、迷わずそうするだろうし、そうしなければ、自分の軍、ひいては自分の家までも失うことになりかねない。熊谷次郎は「あつぱれ大

將軍や。この人一人討ちたてまつりたりとも、負くべきいくさに勝つべき様もなし。また討ちたてまつらずとも、勝つべきいくさに負くことよもあらじ。…」という判断を下すが、これは正しい判断であるとは言いきれまい。むしろこのセリフによって熊谷次郎の人を憐れむ心に広がりを持たせるきっかけを見出だしているのではなかろうか。

換言すると私は、熊谷次郎の意外さに対して印象を持ったということである。熊谷は一の谷の戦場で持つてはならない憐れみを持った。平家の地位を奪うため、戦に勝つことが目的であるにもかかわらず、清盛の甥である敦盛が自分の息子と年が近いということと、顔立ちが美しかったという理由で、助けようとした。この思考に意外性があったので惹かれたのである。一方、熊谷に対する敦盛は、十七という年齢のわりに自分の立場をわきまえて、「ただとくとく首とれ。」という潔さを見せる。この二人がいて感動が呼び起こされるのだろう。けれども私にとって、敦盛の態度には特に感じるものがなかった。むしろそうして当然であると思ったからである。敦盛は笛をふけるほど教養のある人間であるから、当然武士としての心得も身についているであろうし、微妙ではあるが年齢からいって、自分への教育に対しておかしいのではないかということも考えなかったであろう。したがって、敦盛の行動には特に見るべきものがなく、熊谷に対しての印象が強いのである。

また、熊谷は結局敦盛の首を取ることになるのも面白いと思った。なぜなら、語り手のあくまでも物語の枠組みを崩さないという姿勢が、熊谷の出家をおのずから誘うことになるからである。

今「敦盛の最期」を読むに当たって、巻九「一の谷の合戦」の各条と巻十の前半を読んだ。この結果、「敦盛の最期」は際立っているという印象を受けた。それはやはり熊谷の存在に他ならないと思う。

D：30代大学院生男性 作品「走れメロス」（太宰治）

中学生の国語の教科書の中の文学作品の中で心に残っているのは、太宰治の『走れメロス』である。他の作品が、題名だけではなかなか内容を思い出せないのに比べて、『走れメロス』の方は、大まかなあらすじを大体覚えているとともに、いくつかの場面についてはとても印象に残っている。他の作品とは違う何かがあるのだろうか。しかし、その作品を読んだのは、もう20年ほど前のことであり、その内容や感想はあやふやな面がある。

太宰治の作品については、学生の頃、『人間失格』を読んだくらいである。登場人物に同情できるかどうかで、友達と論争したことを覚えている。結局、最初は登場人物に共感したり同情したりできていると思っていたが、次第に登場人物の生き方に同感できなくなり、それ以来、太宰治の作品を読む機会はなかった。

私自身の子供の頃のことを思い出してみると、小学校中学年頃までは、比較的良好物語を読んでいたような気がする。しかし、高学年の頃から、「どうせ作り話なのだから」と考えるようになり、あまり熱中できなくなったように思う。文学作品に対するこのような気持ちは中学生のある時期まで続いたように思う。その後は、『レ・ミゼラブル』など自分の好きな文学作品もできたり、また、遠藤周作や夏目漱石など、好きな作家もできたりし、また文学作品などもよく読むようになってきた。現在は歴史小説などが好きだが、純粋の文学作品というものについては難しいという印象がある。

私自身文学作品や詩歌の解釈については少し苦手意識がある。解説書通りに、解釈したり、納得したりできないことがあるからである。これはセンスの問題だと思うとともに、技術でどこまでカバーできるのか知りたいと思う。(分析批評などの手法がその一つ。)

『走れメロス』は、中学2年の国語の教材文として読んだと思う。今でも、そのおおよそのあらすじは覚えている。特に、友人との約束を守ろうと、必死になって帰り道を急ぐメロスの奮闘の様子や、最期の場面でぎりぎり間に合い、赤いマントを着せてもらい、真っ赤な顔をしたというところが印象に残っている。そのときは、確か友情のすばらしさを書いたものだというふうに解釈したのを覚えている。

しかし改めて読みなおしてみると、それほど、単純に感動できないように感じる箇所もある。確か、中学生のときに読んだときは、本当にメロスは間に合うのだろうかとはらはらしながら読んだような記憶がある。また、障害に会って、なかなか刑場にたどりつけない箇所の描写はもっと長かったように思ったが、今読んでみると、それほど劇的なシーンではなかった。あらすじが、あらかじめわかっているせいであろうか、あるいは感受性がなくなってきたからであろうか。今回は、新潮文庫の本を読んでみたが、中学校の教科書のように挿絵がないという違いがあるのかもしれない。もっとも、疲れて体が動かなくなったときのメロスの心のうちを描写している箇所は、そのような立場になったとしたら、おそらく同じように、悔しさ、申し訳なさを感じたり、言い訳を考えるであろうという気がし、自分自身が当事者のような気さえた。

先ほど、それほど単純に感動できないと述べたが、その理由の一つは、登場人物の性格等が、やや単純であることがあげられる。短編なので仕方がないと思うが、王を除かねばならないと思い、早速行動に移すメロスについてはどうも同感できないところがある。中学生の頃は、友情のすばらしさ、信じることのすばらしさを感じたり、またそのように指導されたような気がする。その印象が強かったために、今でもその物語が印象に残っているのだろう。また、現在読んでみると、少し理想的過ぎるかなという気がする。お互い一度だけ疑ったというセリヌンティウスとメロスが互いに殴る場面、そして、王がそれに感動し、改心する場面などである。一見すると美しい場面のようにもあるが、少し単純過ぎるような気もするというのが感想である。今読むならもう少し、身近で複雑な心境を描いたものがよいように思う。もっとも、現実の世界と比べて、そのような読み取り方をするのはまちがっているのかもしれない。また、あくまでも、自分自身の感想であり、勘違いしている点が多いと思う。

しかし、一方で、もう一度走り始めたメロスがシラクスの市にたどりついてから、刑場に行くまでの場面は、切迫した感じがよく現れていると思う。とくに、のどがつぶれたため目の前まで来ているのに声が届かないところなど、まさに、緊張の場面である。その他、感動する場面としては、「私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ」という箇所である。

作品の中で文語調的な表現がところどころあり、それが物語のスピード感をだしている面があるように思う。

解説の部分を読んでみると、文学作品と著者の人生との関わりが深いことがわかる。作品の背景に深い事実があり、それを理解することなく、ただ作品を読んでいるだけでは十分でないことがわかる。とくに、私自身のように、あまり文学作品の読み取りが深くないものにとって、

そのような背景を知ることによって作品の理解が深まるように思う。

E：20代学部生女性 作品「走れメロス」(太宰治)

幼い頃の私は、絵本の「走れメロス」が大好きでした。絵の魅力というものも大きいけれど、訳も分からずに感動して泣いた覚えがあります。中学校で再びメロスに会うまで、作者が誰かは知りませんでした。

中学生のころ、授業ではもちろんのこと、家に帰っても何度も何度も「走れメロス」を読みました。勉強においても、部活においても、日常に何の悩みもなかった私が、初めて自分の外見以外に欠点を見つけたのでした。私は英雄のようなメロスに心のそこから、憧れました。私は、小さなずい嘘を上手につき、メロスは誠実さの塊で……。今思うと、なぜそんなに熱っぽくなっていったのかと不思議な気もしますが、中学生の頃の独特の空気の中では自然なことだったようです。

先生は、冒頭部分がいいのだと強調しました。「メロスは激怒した」という、この一文で始まる文章は、どれも短く無駄のない簡潔な文によって構成されていて、とても読みやすいことも魅力の一つだと教えられました。

私は、この作品の魅力は、現実にはありえそうもない事を淡々と書くことによって与えられる静かな感動である気がします。朝起きて、新聞を読むとそこには普通の人のちょっとしたいい話、感動があふれています。心が満たされていくような日常の小さな出来事を私たちは何度も繰り返しています。メロスの日常は私には非日常のように思えて、でも憧れることで日常に近づいて、私の心にしみたのだと思います。よく出来たつくり話のような、でも素直に感動できる、どこかで起こりうる不思議な作品です。

同じようにメロスに心酔した友達と、いい人間になって、強い友情で結ばれることを夢みていたころを懐かしく思います。あのころと何も変わらないまま、いつのまにか大学生になり、自分の中学生時代をふり返ると、恥ずかしい事ばかりです。何もかもが幼く、無謀で、本気でメロスに憧れていたことも馬鹿らしいです。でも。中学生のころは確かに、そういうことが当たり前のような空気があったように思えます。

もしかしたら、中学校で「走れメロス」を教えるというのは、ずっと先を見通してのことなのかも知れない。夢中で読んで、でも大人になると少し恥ずかしくなるような作品は、いい思い出になりうるのだ。そう思います。教訓じみた所もあるし、文学的に優れている点も多い、この名作によって少なくとも私は、何ともいえない、若々しい中学生時代を鮮やかに思い出すことができます。今の中学生も、私のようにメロスに熱をあげたりするのか、とても気になります。

F：20代学部生女性 作品「故郷」(魯迅・竹内好訳)

中学校の時に国語教科書で読んだ小説作品ということで、どの教材を読むかについて迷ってしまった。1年から3年までの教科書に目を通した結果、先日の講義で挿し絵について出てきたこともあってか、「故郷」の印象が強かったため、今回はこの「故郷」について読んでみることにした。

中学生の時の私のこの「故郷」に対する印象は、暗い、意味がよくわからない、あまりおも

しろくない、といったものだったように思う。そして今回読み返してみる機会があり、同じ教材を読んでみたわけだが、実際その内容について、以前より理解しながら読むことができたことは確かであると思われる。

この小説文の最初では故郷に帰った主人公の心情について描かれてあるが、自分自身も大学へ来て、中学生だったころにはまるでわからなかった、「故郷へ帰る」という経験をするようになった。この主人公の気持ちが理解できるようになったことは事実で、そのことから冒頭の部分に対する印象は変化したように思う。中学生のときは、その故郷の活気のなさや主人公の持った寂寥の感を「そういうものか」という程度にしか感じず、意味もあまりよくわからないまま読み進んでいっていたように思う。思い出になってしまうといろんなことが変わっていくのかもしれないし、その時その時の気持ち次第で思い出はどんなふうにも変わってしまうのかもしれないと思った。

私は今回、光村図書の教科書を使用したのだが、この教科書では「故郷」は「状況に生きる」という単元の中にあった。今、読んでみると、中国のそのころの様子などを考えながら、登場人物の行動や言葉についてある程度、納得しながら、理解しながら読んでいくことができる部分もあるように思う。中学生の時は私の中で、例えば「ヤンおばさん」はひたすら嫌な人だったような気もする。しかし、その状況にあり、そこで生きる者たちはそのように生きるしかなかったのだろう。外国の、しかも現在ではない時代の作品ということで、その状況を理解するのは結構困難かもしれない。だからこそ、その状況を理解することは重要だと思うし、それがないと作品を読み味わうことはできないように思う。実際私も、状況があまり理解できず、わけがわからず、おもしろみを感じることができなかった。授業の中でそのように状況を理解する機会を与えるということは本当に重要であると思った。

最後の希望と未知についての言葉を中学生のときにどう感じたかはよく覚えていないが、今、改めてその意味を考え、自分を振り返り、考えさせられるものがあるように思った。

一度読んだ作品を「これは読んだことがあるから」というのではなく、時にもう一度読んでみるのもよいものかもしれないと思った。

以上の感想文を対象に、いくつかの観点から考察を加えることとしたい。

再読時の感想に見られる読みの変容

1. 感想の変容の自覚

感想文の中で、過去の感想と今回の再読時の感想との相違についての自覚に基づくと思われる言及は、以下の通りである。

A：過去「中学2年生の時に読んだ際は、友情の大切さを訴えている物語だと思った。」

再読「現在ではこの物語が、人間は信じられる存在であると訴えているように感じている。」

B：過去「作中に登場する中学生は、生き生きと自分の意見を言い、曲がったことには手厳しい。その姿に痛快さを感じたとともに、自分にはない発言力や行動力を持つ彼らにまぶしさを感じていた。」

「自分が持ち得なかった大人びた態度に憧れていた面もあった。」

再読「中学生の立場に自分を重ねて読んでいたのが、臨採で西文平達の3年C組を担当するようになった葛原順に自分を重ねた点である。」

「以前は大人に感じていた西文平を、とても幼くもろい存在であると捉え直したことである。」

C：過去「当時持った感想として今でも覚えているのが、「熊谷はどうして敦盛を殺したのか。殺せと言われたからといって、人殺しは絶対によくない。」ということである。」

再読「熊谷次郎の武者に似合わぬ憐憫の情という事に強い印象を持った。」

D：過去「そのときは、確か友情のすばらしさを書いたものだというふうに解釈したのを覚えている。」

「本当にメロスは間に合うのだろうかとはらはらしながら読んだような記憶がある。」

再読「それほど、単純に感動できないように感じる箇所もある。」

「現在読んでみると、少し理想的過ぎるかなという気がする。」

「少し単純過ぎるような気もするというのが感想である。」

E：過去「若い頃の私は、絵本の「走れメロス」が大好きでした。絵の魅力というのも大きいけれど、訳も分からずに感動して泣いた覚えがあります。」

「中学生のころ、授業ではもちろんのこと、家に帰っても何度も何度も「走れメロス」を読みました。(中略)私は英雄のようなメロスに心のそこから、憧れました。」

再読「私は、この作品の魅力は、現実にはありえそうもない事を淡々と書くことによって与えられる静かな感動である気がします。」

F：過去「中学生の時の私のこの「故郷」に対する印象は、暗い、意味がよくわからない、あまりおもしろくない、といったものだったように思う。」

再読「実際その内容について、以前より理解しながら読むことができたことは確かであると思われる。」

以上の言及を見ると、感想の変容が自覚されており、およそ次のような変容の内実が見られることが把握できる。

A：主題の把握の変容（「訴えている」という言葉に主題が示されると分析）

B：感情移入の対象の変容、それに伴う人物像理解の変容（「痛快さ」「まぶしさ」「憧れ」「自分を重ねた」という言葉に感情移入が示され、「西文平を…」「大人」「幼くもろい」という言葉に人物像理解が示されると分析）

C：人物像理解の変容（「熊谷は…」という記述に人物像理解が示されると分析）

D：作品と自分との距離の変容（主題把握とも関わるが、新たな主題把握が明示されておらず、「単純に感動できない」といった記述になっているので、作品との距離というように分析した）

E：作品と自分との距離の変容、それに伴う主題把握の変容（「訳も分からずに感動して泣いた」「心のそこから、憧れました」「静かな感動」といった記述から分析。また、「作品の魅力は…」という記述は主題把握に近いと分析）

F：作品世界の理解度の変容（「意味がよくわからない」「理解しながら読むことができた」という記述から分析）

教示文が「かつての感想と比較しながら感想を書いてください。」というものであったこともあり、その当時の感想を抱いた自分自身のあり方そのものへ関心が向かったことがうかがわれる。その点では、純粋な読みのあり方そのものを比較するものにはならなかったが、それでも、教材になった文学作品の読みの変容は再読時に十分自覚されるものであることが把握される。しかもそれは、「作品と自分との距離」や「主題の把握」や「人物像理解」といった読みの中核的内容に関わっていることがわかる。

2. 感想の変容をもたらすもの

では、このような感想の変容をもたらしたものは何であろうか。感想文の中には、このことについて、それぞれ次のような言及がみられる。

A：「私はディオニスが「疑うのが、正当の心構えなのだと、私に教えたのは、お前たちだ。」と言ったのがよくわかる。「口では、どんな清らかなことでも言える」という言葉は私自身の経験から理解できる。」

B：「当時の自分が持ち得なかった大人びたその態度に憧れていた面もあった。」
「学校という組織の中で考えると、教員としては責任を果たしていない点も多いとは思いますが、今の時代に合わせても理想の教師像と言えるだろう。」

C：「殺人は悪であり、人助けが善であるというきわめて単純な認識を持っていたに違いない。」
「物語の読みというところから離れて、作品と現実の自分の経験とを関連させて考えていたのではないだろうかと思う。」

D：「今読んでみると、それほど劇的なシーンではなかった。あらすじが、あらかじめわかっているせいであろうか、あるいは感受性がなくなってきたせいであろうか。」

E：「あのころと何も変わらないまま、いつのまにか大学生になり、自分の中学生時代をふり返ると、恥ずかしいことばかりです。何もかもが幼く、無謀で、本気でメロスに憧れていたことも馬鹿らしいです。でも、中学生のころは確かに、そういうことが当たり前のような空気があったように思えます。」

F：「自分自身も大学へ来て、中学生だったころにはまるでわからなかった、「故郷へ帰る」という経験をするようになった。この主人公の気持ちが理解できるようになったことは事実で、そのことから冒頭の部分に対する印象は変化したように思う。」

「外国の、しかも現在ではない時代の作品ということで、その状況を理解することは重要だと思うし、それがないと作品を読み味わうことはできないように思う。」

以上の言及から、直接・間接の言及の仕方は異なるものの、およそ次のような点を感想の変容をもたらすものとして意識していることがうかがわれる。

A：経験を積むことによる変容（「私自身の経験から」という記述がある）

B：立場が異なることによる対象認識の変化による変容（現在は「大人びた態度」を持っている。また、教師の立場を実習などで経験した現在持ち得る教育観、教職観が反映されていると思われる）

C：対象認識の変化による変容（「きわめて単純な認識」といった記述から認識の変容が読みとれる。また、現在の自分は人物像理解の上で、作品を自分の経験そのものとは関連付けていないと自覚していると思われる）

D：感受性の変化による変容（疑問形ながら直接言及されている）

E：感受性の変化による変容（「恥ずかしい」「馬鹿らしい」という記述がそうした内容を示していると思われる）

F：経験を積むことによる変容・知識の広がりによる変容（経験による心情理解、知識による背景的状况理解に言及がなされている）

このように見てみると、やはり教示文の効果もあって、ほとんどが作品を読む自分自身のあり方の変化、しかもどちらかというと人格に関わる変化を、読みの変容の理由として見ていることがわかる。確かに、読みには、読み手のコードが関与するものであり、そうした読み手の側の持つコードの変化に目がいくであろう。そして、今回の調査がちょうど少年期から青年期への変化に重なっているため、読み手の成長に伴う、作品の外側にあるいわゆる外在的なコードに関わって読みの変容が意識化されたものであろう。しかし、同時に、それぞれの読み手において、作品の内側に関わるコードも変化しているはずである。それはいわば読み方そのものに関わる知識の広がり、文学作品そのものに対する認識の変化による読みの変容とでもいうべきものである。この点についてもいくつかの言及があるので検討してみたい。

3. 読み方の変容の自覚

読み方の変容に関する言及とみられるものとして、以下のものをあげることができる。

C：「現在の私がこの作品を改めて読むにあたって考えたのは、時代背景と前後関係である。」

「語り手のあくまでも物語の枠組みを崩さないという姿勢が、熊谷の出家をおのずから誘うことになるからである。」

D：「それほど単純に感動できないと述べたが、その理由の一つは、登場人物の性格などが、やや単純であることがあげられる。」

「作品の中で文語調的な表現がところどころあり、それが物語のスピード感をだしている面があるように思う。」

F：「今、読んでみると、中国のそのころの様子などを考えながら、登場人物の行動や言葉についてある程度、納得しながら、理解しながら読んでいくことができる部分もあるように思う。」

ここでは、時代背景・前後関係・語り手（の姿勢）・登場人物の性格・文語調的な表現・物語のスピード感・登場人物の行動といった、文学作品を読む上での観点が提示されている。このような観点は、文学作品を読むという経験そのものや、そこから離れた人生経験そのものにおいて学習されていくものではない。読むことについての学習経験がなければこうした読みの方略に関わる方法的概念は身につかないものであろう。しかもそうした学習経験のほとんどは、学校教育における国語科の学習の中で身に付いてきたものであろうと推測される。それが当然のことであるだけに、読みの変容の自覚化において、明確には意識されなかったものであろう。このことについて、一部の調査対象者に実施したインタビューの内容から、関連する部分を見てみると次のような箇所がある。（Iはインタビュアー、A・Cは調査対象者）

I：時代背景と前後関係ということですが、これはテキスト外の知識ということですか？

C：それもあります。

I : それもという？

C : テキストの中から読みとれるものと、軍記関係の背景と・・・

I : テキストの中から読みとれるということは、中学生の時はそこまで読みとれなかったということになりますか？

C : あまり考えなかった・・・

I : なぜそういうものを読みとれるようになったのかということについては？

C : 深く作品を理解したいと思うと、そういうところに関心がいくようになったということです。

I : 前後関係というのはどういうことを言っているのでしょうか。

C : 敦盛の最期という場面がどういうつながりで出てきているのかということも知りたいなということです。それで、通して読んでみました。

I : 今回は、ある登場人物に近づいて読んでみたということですが、なぜですか？

C : 軍記を読む中でいろいろな読み方をするようになったということです。

I : そういう読み方は大学に入ってからのことですか？

C : そうです。最近だと思います。

I : 主題の捉え方が違うことの最も大きい理由は何だと思いますか？

A : 人間は信じられる存在だと捉えられるようになったのは、高校の時に太宰の他の作品を読んだ経験から、メロスに帰ってみるとそういう見方をするようになったということです。

I : 読み方の変化はないですか？

A : 中学生の時は主人公と同化するという方向で読んでたんですが、今は他の立場からも読めるようになったということです。

I : それはどうしてですか？

A : 一步作品から離れて読めるようになったということです。

I : 中学校の授業では、登場人物たとえばディオニスの人物像の整理はしなかったんですか？

A : しませんでした。

Cは、高校時代に教科書教材として「敦盛の最期」を読んだ際には、教師の解釈を聞くだけだったが、受験勉強を通じて文語を読めるようになり、大学での卒業論文を契機として軍記物に親しむうち、登場人物の視点を変えたり、ある人物に着目して一連の物語の断片をつなげて読むというような読み方を学習していったというようなことをこのあと述べている。そうした中で、「時代背景」「前後関係」といった言葉で表される読みの方略を身につけ、そのことによって読みが変容したわけである。

一方Aは、自分の読書経験の広がり的一步離れて作品を読むことを可能にしたというようなことを述べているが、中学時代に授業で「走れメロス」に出会ったとき、もっぱら主人公メロスに感情移入する読みが行われたことを示唆している。

調査対象者に共通していたのは、学校において主人公に感情移入・同化する読みを指導されており、テキスト分析に必要な読みの方略に関してはほとんど指導されてこなかったということであった。しかし、たとえば「山月記」の月が何を象徴するかというようなことを考えるよ

うなことはしなかったかと尋ねたところ次のように答えている。

I：高校の時「山月記」やったよね。そこでたとえば「月」がどういう役割を果たしているか、何を象徴しているかというようなことはやらなかった？

A：ああ、やりました。それまではそういうことには気づきませんでした。言葉に表面上以外の意味があるということをそれまで自覚したことがなかったんです。

B：授業ではやりませんでした。そういうことは言われてみるとああと思うけど、言われないと気づきません。

それぞれの学習歴に左右されるが、読みの方略に関わる知識は、指導されれば身につくものであることがある程度推測される。明確に自覚されることはないのかもしれないが、そうした知識・技能がその後の読みに影響を与える可能性はあるものと考えられる。実際にAは、大学院の演習で、ある太宰作品を読む際に「薔薇」の象徴するものを意識的に考えたということを報告している。

今回の調査では十分明確にできなかったが、一定の時間を置いて文学作品を再読すると、初読時の読みと再読時の読みには違いが見られること、その変容は自覚されるものであること、その変容をもたらす要因としては、経験に伴う読み手のあり方、認識の変化があげられるとともに、読書経験の積み重ねや国語科授業を通した読みの方略に関する知識・技能の蓄積が示唆されること、というような点が示された。

おわりに

増田信一は、発達段階というような観点から、読書感想能力の発達を、「読書感想以前の段階」「単純反応の段階」「内容理解の段階」「自己判断の段階」「行動変革・人間改革の段階」の四段階に分け、小学校低学年から高校にかけて次第に後者の段階に感想が移行していくことを数字を挙げて明らかにしている。⁴

ここでの問題意識を重ねてさらに一歩進めれば、国語科授業での読みの指導がその後の読みにどのような影響を与えて、読みが変容していくのかということを探求することも可能であろう。

そして、生涯学習社会における教科指導の役割を考えると、国語科における読みの指導が、その後の読書生活を豊かなものにする方向で機能しなければならないことは明白である。インタビューにおける調査対象者の中でも、読みの方略に関する指導を受けた経験のある学生は、そうした読みの経験を、大学という特殊な環境の中ではあるが、応用的に用いていることがわかるし、指導を受けなかった学生は、大学における新たな学びの経験の中でそうした読みの方略を獲得しつつあることがわかる。増田の言う読書感想能力の発達は、自然発生的な成長に伴うものばかりではなく、国語科の学習指導そのものによっても支えられているものであろうし、またそうあらねばならない。

今後は、成人の日常的な読書において有効に働く読みの方略にはどのようなものがあるか、

どのような読みの方略がどのような読みの変容をもたらすのかといったことを明らかにし、学校教育における国語科の学習指導のあり方に反映させていくことを考えなくてはならないだろう。

調査対象者の学生は次のようなことを書いていた。

もしかしたら、中学校で「走れメロス」を教えるというのは、ずっと先を見通してのことなのかも知れない。夢中で読んで、でも大人になると少し恥ずかしくなるような作品は、いい思い出になりうるのだ。そう思います。教訓じみた所もあるし、文学的に優れている点も多い、この名作によって少なくとも私は、何ともいえない、若々しい中学生時代を鮮やかに思い出すことができます。

国語科の教材がこのような観点で選ばれているわけではないが、この感想は国語科における文学教材の意味のある重要な側面を指摘しているように思われる。「源氏物語」などは、確かに高校生の読み手よりは大人の読み手を要求している。やがて「源氏物語」を読み返すときのために、高校での古典の授業があるという側面もあるだろう。そうでなければ、古典文を読めるようになることの意義はあるまい。国語科において扱われるべき教育内容はそうした新たな視点からの再検討を待っている。

*1 西川純・新井郁男・熊谷光一・田部俊充・松本修：生涯教育から見た各科教育－保護者（成人）の学校時代の教科教育に対する評価を中心に－，学校教育研究 12「教育課程再編の方向を探る」，日本学校教育学会，1997. pp.136-147.

*2 藤森裕治：高校生・大学生は児童文学をどう読むか－物語の再読にみられる読書感想の諸相－，日本読書学会第44回発表資料集，2000. 9. pp.81-90.

*3 藤森氏からいただいた資料による。

*4 増田信一：読書感想能力発達の段階，国語科教育基本論文集成 18 国語科読書指導論，明治図書，1993.